

今月の谷口雅春先生のお言葉

子供の「神の子」のいのちを引き出すために

取越苦労は必要ない

多くの母親は子供のことをあまりに取越苦労とりこしくろうするため、却かえって子供に悪思念あくしねんを放送して子供の健康や運命を害している。或ある母親は一瞬間でも自分の眼めの前まへにいないと心配でたまらないのである。彼は自分の想像さうぞうの中で、躓つまずいて転んでいる自分の子供の姿を思い浮うかべる。自動車にひかれて死にかかっている自分の子供の姿を思い浮うかべる。水みづに陥おぼって溺おぼれかかっている自分の子供の姿を思い浮うかべる。世の母親よ、何故なぜあなたはこの反対をしてはいけないのか。こんな取越苦労が起るのは、子供を神の子

だと思わないで人間の子だと思うからである。神の子は神が育て、人間の子は人間が育てる。人間の子だと思うものは終世しゅうせい、取越苦労をして育てねばならぬ。子供を神の子だと思うものは、子供を尊敬して出来るだけその世話をさせては頂たまぐが、神が守って給たまうと信ゆずるが故ゆえに取越苦労は必要はないのである。人間力で子供を生かすし得うると思おもうなら終日終夜しゅうじつしゅうや起きて子供の番ばんをしておれ。それは出来なからう。出来ない間に子供を生かしているのは神の力である。

(新編『生命の實相』第22巻2頁)

子供の内には無限の能力が宿とどまっている

人間の内には実に無限の潜在能力が埋蔵せられているのである。深く穿つに従ってどれだけでも豊かにその潜在能力を掘り出すことが出来るのである。穿つとは自覚

するということである。自覚しさえすれば埋蔵せる宝は常に掌中のものとなるのである。だから表面にある能力だけを自分の全部だと子供に思わすな。表面にある「自分」は「真の自分」の唯の「小出し」にしか過ぎないことを知らせよ。「小出し」は使うのに便利かもしれないが、この「小出し」を自分の全部だと思ってしまうたならば大いなる発達は望めないのである。常に子供に教えて小成に安んずるなどいえ。小成は自分の「小出し」に過ぎないこと、今ある彼の能力はすべて「小出し」に過ぎないこと、「小出し」は決して誇るに足りないこと、つねに「小出し」に満足せず、本源、即ち無限の潜在能力(神)より汲むように努力すること——常にかくの如き真理を子供に解る言葉で教えるように心懸ければ、現在の自分に満足する子供の傲慢心は打砕かれ、驕傲は消滅せしめられ、永遠に能力の伸びる精神的基礎は築かれるのである。自分の内部の生命が無限の大生命に連つており、そこに自分の本当の宝が在る

のだということが判るとき、いま僅かに掘り出した能力の「小出し」位に傲慢になつてゐることは出来なくならざるを得ないのである。

(新編『生命の實相』第22巻159〜160頁)

「人間は神の子」と言つて聞かせること

「無限の自己」——これを真如とも、法性とも、自性とも、仏性とも、実相とも、「本来の面目」とも、「自己に宿るキリスト」とも、「彦(日子)又は姫(日女)としての自己の本質」ともいふのである。しかしかくの如き言を解せぬ幼き子供に対しては、「人間は神の子だ。子の顔が親の顔に似ているように、汝の能力と性質とは神の姿に肖せてつくられているのだ。神はこの世界の万物をつくられたのであつて、人間は神の子として、神の無限に大きな能力のあとつぎに造られているのだ、だから神の子は神の子らしく生きねばならぬ。神から譲られている無限に大きな能力を発現しようと思わないものは、親から折角頂いた宝の庫を開かないで棄ててしまふものだ」こういう意味の話を時々言葉

を変えて子供に話して聞かせることにして、人間の本性の尊いこと、その潜在能力の無限であることを子供の心に吹き込むようにすれば好いのである。すると、子供は次第に「本当の自分」が如何に崇高く靈妙なものであるかを知りはじめる。

（新編『生命の實相』第22巻161～162頁）

わが子は偉大な使命をもつて

生まれてきている

諸君よ、先ず子供に教えよ。彼自身の生命の尊さを。——人間の生命の尊さを——そこには無限力の神が宿っていることを。展げば無限の力を発し、無限の天才をあらわし、彼自身の為のみならず、人類全体の輝きとなるものが彼自身の内に在ることを教えよ。彼をして彼が地上に生命を受けて来たのは、自分自身のためのみでないこと。人類全体の輝きを増し、人類全体の幸福を増すために神が偉大な使命を彼に与えて来たのであることを教えよ。この自覚こそ、最初の最も根本的な自覚であって、この自覚が幼時に植えつけられたものは必ず横道

に外れないで、真に人類の公けな喜びのため何事かを奉仕しようと喜び励む人になるのである。

常に子供を鞭撻して、彼の善さを力説せよ。彼の美点を強調せよ、自分自身の有つ長所を自覚せしめよ。ここに子供を教養する極意があるのである。美点を強調し、弱点を忘却せしめ、失意に枉屈（編註：抑えつけられて屈すること）する時間を希望に躍進する時間に変化せしめよ。彼もし希望に輝き、美点にのみ躍進を続けるならば、弱点に執着し、弱点を考え、失敗を悲しんでいゝ暇はないのである。心を弱点に置かないとき、行いに弱点を繰返す暇がないとき、その弱点を再び繰返す傾向はうすれて来るのである。ここに彼の美点のみが発揮され、長所のみが生長する。

（新編『生命の實相』第22巻174～175頁）

